北欧教育視察報告

国際学部こども教育学科
市川洋子

毎年海外の教育視察を行っています（副理事長を務める NPO 法人日本 PBL 研究所主催）。今年は、11 月 4 日から 11 日まで、スウェーデン・フィンランドの教育視察を行ってきました。こども教育学科の清宮翼さんも参加しました。スウェーデンで 2 校、フィンランドで 3 校とフィンランド教育省を視察しました。この視察の中で、特に印象に残ったことを報告します。

① Saltsjöbadens Samskola（**スウェーデン**）

この学校で最も驚いたのは三者面談です。主導するのはなんと生徒自身でした。この面談のために、生徒は何週間も前から資料を準備します。これまでの学習や生活を振り返り、成果と課題を担任と保護者の前でプレゼンテーションします。

なぜ生徒主導なのでしょうか。それは、自己の成長を自覚させることで学習や学校生活に主体的に取り組むことができるようになることと、Reflective thinking（内省的思考力）を育成することができるからです。特に、内省的思考力は、21 世紀の社会をよりよく生きていくために必要な能力（キー・コンピテンシー）の基盤をなす重要なものです。

三者面談を終えたエヴァと彼女のお母さんに感想を聞いてみました。エヴァ「先生を独り占めできることが嬉しいし、困ったときに相談できることはとってもいい。自分の目標を先生が理解してくれて、到達するために助言してくれるのもいい」、お母さんは「私の頃はこんなのなかったから、彼女がうらやましいわ」との答えが返ってきました。

②Espoo International Joint Comprehensive School（フィンランド）

この学校の校長先生のインタビューの中で、「フィンランドの教師が尊敬されるのは、修士を修了していること、薬学部レベルの学力の高さ、教師の裁量に任されている部分が多いから」という説明があり、私はそこから思考が前に進まなくなってしまいました。私たちの質問に答えてくださる校長先生の横顔を見つめながら、日本の先生や教員を目指す学生の姿が頭をよぎり、羨望と焦燥感が入り交じった複雑な思いを抱かずにはいられなかったのです。この複雑な思いを一部文章化するとこうなります。

●一介の（失礼）校長でありながら、社会構成主義に立つフィンランドの教育理念を理解し、現代の社会状況と教育課題を把握し、よいと思ったことを実行に移す力量と、新しい教育方法の理論を実践する先生たちに全幅の信頼を寄せている。

●PISA 調査において、日本が V 字回復したことで、日本の教育の優秀さが再認識されたが、シュライヒャーOECD 教育・スキル局長曰く、「『ゆとり教育は失敗だった』と聞かされました。…しかし、PISA の結果を分析すると、正解が複数ある問題に対応する力が最も伸びていたのは日本でした。しかしながら、…PISA の最も興味深い結果は、教える量と、教育の結果の質の間に相関関係がないことです。フィンランドは日本の授業時間の約半分ですが、教育の成果は、ほぼ似ています。大切なのは教育課程の深さです。」（朝日新聞平成 30 年 3 月 26 日刊）

学習指導要領が改訂されて、内容と時間が増えた新しい教育課程が始まる。学習指導要領を読むと、子どもが学ぶということについての考え方が広がったと感じるが、教育内容は依然としてあれもこれもの網羅主義から抜け出ていない。固定した時間枠の中に、これ以上詰め込むことが無理なことは明らかであり、学びの構造そのものを変える必要がある。

シュライヒャー氏は、教育課程の深さを「教える内容を増やすことは誰でもできますが、難しいのは厳選すること」と述べている。同感である。教える内容を厳選するのに加えて、子どもが主体的に深く学んでいくことができるカリキュラム構造と学びの環境ではないだろうか。

フィンランド教育省にて

●今回の学習指導要領の改訂によって、日本の教育改革が一歩前進か？基礎基本の定着を図り、主体的、対話的で深い学びを実践し、そのためにカリキュラムマネージメントをしっかりと…。平成 29 年 12 月に、学校における働き方改革に関する緊急対策 が出されるぐらいの長時間勤務を強いられ疲弊する日本の先生たちに、どれだけの余力が残されているのだろうか。教育のコストパフォーマンスからいえば日本の教師は世界一である。その優秀さに頼っていたのでは、いつまでたっても教育課程の深さは生み出されない。